

5. 新規患者の年齢構成 30代と、70代以上が増加傾向
6. 平均在院日数 最近になり縮小している。
7. 疾患別平均在院日数 分裂病で低下、気分障害で増加の傾向
8. 再入院率 わずかに増加傾向にある。
9. 急性期治療病棟の施設基準 40%を越えることが望まれているが、60-70%でクリア

#### まとめ-課題と問題点

1. 平均在院日数は縮小しているが、再入院率がわずかに増加している。特に精神分裂病について、治療上現在の3か月以内の退院の是非について検討が必要と思われる。
2. 疾患別では気分障害での平均在院日数の増加が認められる。
3. 療養棟の在院日数の増加の問題が出ている。
4. 増床について、その必要性や経営面での問題点を今後考えていく必要がある。

#### 6) アルツハイマー型痴呆における色覚反応の特徴 — 色別発光ダイオードを用いた視覚誘発電位の研究

吉浜 淳・山手 威人 (立川メディカルセン)  
 柳 日出彦・坂井 乃美 (ター柏崎厚生病院)  
 直井 孝二・松田ひろし (精神科)  
 前畑 幸彦 (同 内科)  
 山田 治 (東京大学 精神医学)  
 結城 麻奈・飯森真喜雄 (東京医科大学 精神医学)

視覚誘発電位検査において、ピーク発光波長 ( $\lambda$ p) が、660 nm (赤) と、567 nm (緑) の2種の発光ダイオード (light emitting diode; LED) を用いたゴーグル型の刺激装置を使用し、健常成人、健常老人と、アルツハイマー型痴呆 (以下 DAT) 患者を対象として検査を行い、その色 (波長) 別による特徴について検討した。

#### 【結果】

- 1) 健常成人群では、すべての頂点潜時で、赤 (660 nm) より緑 (567 nm) が有意に延長していた。健常老人群、DAT 患者群では、差が認められないか、有意差はないが、逆に赤が緑より延長する傾向がみられた。
- 2) それぞれの色別の群間比較については、赤においては健常成人群より、健常老人群、DAT 患者群で有意な延長が認められた。緑においては、赤に比べて有意な

差が少なかった。

3) 今回健常老人群と DAT 患者群では有意な差は認められなかった。

【考察】今回の検査では、刺激の色 (波長) の差により、健常成人群ではその差が有意に認められたが、健常老人群、DAT 患者群では、その差が明瞭に認められなかった。色覚は高次視覚中枢では、外側膝状体、皮質の V1 と V4 が関与していると考えられているが、この結果はこれらの神経中枢の加齢による変化 (老化現象) を反映している可能性を考えた。今回の結果では健常老人群と DAT 患者群では有意な差は認められなかったが、これは健常老人群の平均年齢が DAT 患者群に比して有意に高かったことが原因と思われた。

また、緑 (567 nm) が赤 (660 nm) に比べて有意な差が少なかったことは、比視感度 (知覚される明るさ) の差 (緑>赤) を考慮しても興味深い結果であり、今後の課題となると思われた。

#### 7) 痴呆患者のターミナルケア

##### — 痴呆性疾患療養病棟での取り組みと限界 —

小川 春江・山田 誠  
 武藤真砂美・有田 敏子  
 勝井 丈美 (河渡病院)

当院の、痴呆性疾患療養病棟がスタートして2年を経た。その間にターミナルステージを迎えたり、既にターミナルステージにある痴呆患者を、一般病院や老人保健施設から受け入れざるを得ないこともあった。療養型の少ない看護職員と包括医療の中で、取り組んできたターミナルケアの現状と限界について報告する。

##### 当病棟でのターミナルケアの実態

H10年7月からの2年間に、ターミナル患者は合計11名であった。重症身体疾患によるものが10名。重度痴呆で経口摂取不能によるものが1名。その後の処遇の内訳は、他病院への転院が4名。老人保健施設への転出が1名。他の病棟への転棟が3名。当病棟で死亡が2名。現在も療養中が1名である。ターミナルケアの期間は半月から7ヶ月 (平均2ヶ月) であった。当病棟より転院・転出した患者は、2名以外は全員2ヵ月以内に死の転帰をとっていた。

症例：TN 92才 男性 アルツハイマー型痴呆 摂食困難

重度の痴呆で叩く、蹴る、髪をむしるの暴力を伴う介護拒否があり老人保健施設から入院。食事への関心がな